

「環境・人間・技術」と国家 —状況変換の認識—

小野 哲

環境・人間・技術

- イ 環境とは非人類的現象いわゆる地球環境の自然的部分といってもいいが、人工の部分（植林、砂漠化、水田、耕地化、荘園、都市化…から汚染、過剰蓄積、変種、淘汰……）も無視しえないから、天然環境に限らないで生存生活環境をも合わせ、海も空も宇宙さえも地表も地下海底もカウントし、過去現在将来の状況も含むと措定する。
- ロ 人間とは人類の生きざまを含めて、主体的に活動し、思惟することを特徴にするヒトと、ヒトヒトのこと（人種論は寄せ付けない）この人と人々の思想行動行為をふくむ。
- ハ 技術とは人間の編み出したものと事柄の一切。平たくいって人工と、その技法を網羅し、言語も掟も、日常と非常の用具すべてを技術と措定する。
- ニ 補足 環境に技術の所産を「財」として加えたものを文明とし、「思想財」を念頭に環境に加えたとき文化とする。蛇足 文明と文化は双子でなく異母兄弟のような……
- ホ 釈明すべきこと 環境という言葉は近年多用され、それぞれ使い分けられているし、混乱誤解もあるが、この稿では頓着せず、1930年代からの一貫した用語例にしたがう。また、人間は、ヒトとヒトビトで押す。そして技術は、技と略し、通常の技術より広く用語する。ARTである。

さて

国家は人工であり、過去に創設され、現在も存在する、かなり多様な社会的構造物であるが、しばしば法人格を備えて、法の法など恐るべき語法（これも技）で解明されるから、技の技である。しかし此処では、非常識な法論は一切しない。社会構造物は国家に限らないから、更に云えば、すべて社会は構造で技とも見うるから、国家とそうでないものの分別は、やりようによってはエンドレスの掟の網の組み上げ作業になる。それも本稿は避けるから、「環境・人間・技術」すなわち環人技の論の

中で位置づけるに留める。

改めて国家を措定すれば、人類史の過去に創設され、状況変換を経て、今日に関連構成される社会構成体で、技である。ものではあるが物ではない。「こと」というべき「もの」なのかも、ヒトに似て。

環境・人間・技術は、状況変換の認識であるから、過去についても現在についても、したがって、将来についても、その能性はかわらない。環人技の論のよりどころは、社会史観であって、その意識形態の変換を検討する作業において、国家の辿った道程は解明される。

本稿では、状況変換の認識を、実例において、こまった誤解を含めて展開しようと思う。

状況変換の認識 その実例 1

1925ケンブリッジの自由党夏季大会での講演 J.M.ケインズ 山田文雄訳 昭和28年

現代教養文庫84 社会思想研究会出版部 p61~80

人が生まれながら政治的生物であるとするなら、ある政党に属しないということは、最も不愉快なことである。……自分の属する政党が強力でその政綱と哲学が同情的で集団的な現実的な知的な……奮って参加することや暇な時間をさく価値があるということ……さて私自身の場合……保守党のものとしてやっていけるだろうか。それは食べ物も飲み物も知的な慰安も与えてくれない。愉しみもなく刺激もなく教化もない……それはどこへも通じない。なんの理想も満足させないし、なんの知的標準をも与えない。それは我々が現に到達している文明の段階さえ崩す危険があり、それを維持するとも考えられない。

しからば私は労働党に参加すべきであろうか。表向きそれは、より魅力がある。しかし仔細に見るとそこにはいくつかの大きな問題がある。まずそれは階級政党であり、その階級は私の階級ではない。もし私がなんらか党派的利益を追求するのなら、私は自分自身の利益を追求する。階級の争いということになるなら、私の地域的また個人的愛国心は、他の人のそれと同様に、ある不快な嫉妬的なものを除いて、私自身の環境に結びついて……私は正義と考えられ良識と考えられるものの影響を受けることができる。しかし階級闘争に際しては私は教育あるブルジョアジーの側に立つ。しかしなによりも労働党の中の知的な要素が、妥当な支配を行うだろうとは信じられない。自分たちが語っているところのことを全然知らない人々によって、余りにも多くのことが常に決定される。

そしてありえないことではないのだが、もし政党の支配が独裁的な部門の集団によって握られているなら、この支配は極左派の、労働党の中の破壊党と私の呼ぶ派の利益のために行なわれる。

一つ一つ否定してゆくと、自由党がなお将来の進歩のために最も役立つもの—もしそれが強力な指導者と正しい綱領を持った場合の話として—と考へざるをえない。

しかし我々が政党の問題を積極的に考える段になると、反発するのではなく惹き付けることに関しても、すべての政党に関してと同様に、我々の希望を人に置くべきなのか政策に置くべきなのか、情勢は陰鬱である。そして理由はすべての場合を通じて同一である。十九世紀の歴史における政党の問題は、一週間前の羊肉と同じように死んでいる。将来の問題がぼんやり浮かび上がっているだけで、それはまだ政党の問題とはならず、旧い政党のラインにぶつかっているだけである。

市民的自由や宗教上の自由、参政権、アイルランド問題、連邦の自治、上院の権力、急激に替わっていく所得税、財産税、公共の歳入を社会改良に対して法外に使用すること、すなわち疾病に対する社会保険、失業、老年、教育、住宅ならびに公衆衛生の問題、これら自由党がそれに対して闘ってきたすべての問題は、実施されたものもあり、古くさくなったものもあり、すべての政党に共通のものとなったものもある。他に何が残っているか。ある人はいうだろう。土地問題がと。しかし私は賛成しない。なぜなら、この問題は伝統的な形で、事実が沈黙の中で変ってきたため、ほとんど政治的な重要性がなくなったと信ずるから。今日なお価値のある歴史上の自由党の立場は二つある。飲酒問題と自由貿易とである。

このうち自由貿易は偶然大きな生きた問題として残っている。常に二つの議論があった。自由主義個人主義者の賛成を今も得ている自由放任論と、各国が比較的利益を持っている資源を利用することから生ずる利益に基づいた経済論とである。自由貿易論が飾った政治哲学を私は今も信じようとはしない。私は自由貿易が長い目で見て一般的に技術的に健全で知的に堅実だという理由でこれを信ずるものである。……はたして自由党が、土地問題、飲酒問題の上にその身を維持することができたか、また自由貿易だけを、両者の上に結合した明白な綱領として維持することができたか。自由党員であるための積極的議論は、今日では甚だ弱い。その他の政党も果たして積極的な試練に耐えて残存できるだろうか。

保守党は常に頑固屋の巣としての地位を保つだろうが、建設の面から

は自由党と同じまじい立場にある。進歩的な若い保守党員を普通の自由党員から区別するところは、政策とか理想とかの差ではなく、偶然の気分とか過去との繋がりとかによることが多い……教会、貴族政治、土地所有の利益、財産権、帝国の栄光、奉仕の誇り、さらにビールとウイスキーと……再び英帝国の政治の指導力になることはないだろう。

保守党は進歩的な事情の変化に対応する個人主義の諸説を發展させるべきである。シテイや議会の資本主義の指導者たちが、ボルシェヴィズムから資本主義を守る新しい方法を案出できない点に困難がある。もし旧式の資本主義が、知性でもって防御できたなら長年その地位を失うことはなかったろう、しかし社会主義にとっては幸運にも、そういった機会はほとんどない。私は個人主義的資本主義の知的衰退の芽は……以前の封建主義の社会制度から引き継いだ制度、すなわち世襲の原則にあると信じている。富の譲渡や事業の管理についての世襲の原則は、資本主義指導の弱みで馬鹿馬鹿しさの理由でもある。それは三代目によって支配されることの多さ、世襲への固執が、社会制度を確実に衰退させる最大の原因である。我々の中の最も古い制度の社会が世襲によって腐敗から守られてきた逆説は事情を説明している。

保守党が頑固派を代表すると同様に、労働党は破壊党の側に立っている、それをジャコバンとよぶか、共産主義者とよぶか、ボルシェヴィストとよぶかは御自由である。

この政党は現在制度を憎み軽蔑し、善意は単にこの制度を倒すことから生ずる、少なくともそれを倒すことが大いなる善にとって必要な前提と、信じている。この政党は社会的圧迫の空気の中のみ、頑固派の支配に対する反抗としてのみ栄えることができる。英帝国ではその極端な派の人数は大変少ない。しかし私の考えでは、その哲学は薄められた形で、全労働党にしみこんでいる。その指導者が心の中でどれだけ中庸を得ていても、労働党は破壊党の完全な発展の中に広く情熱と嫉妬とを植え付けることで、その選挙の勝利を、得られると考える。私は信じる、破壊党に対するひそかな同情は、労働党が生み出す建設的な船の耐水性を蝕む虫であると。富と権力を持つものに対する悪意、嫉妬、憎悪の感情は、彼ら自身の内心においても、真正の社会主義共和国を建設するという理想にふさわしくない……労働の指導者として成功するためには、少なくともそう見えるためには、いささか野蛮であることが必要であるが、彼は自分の仲間を愛するだけでは足りず、憎むことも必要なのだ。

さて私は自由主義が何であって欲しいと望むか。一方において保守主

義は明確に規定できる実態である。それは頑固者の権利、それに力と情熱を与え、教育あり人間的な、道徳的と知的に尊敬すべき性質を与える保守的自由貿易論者の「最善のかたち」と称すべきものの最左翼である。他方において労働党は、これに同じく明確に規定できる実態を力と情熱を与える破壊主義者の左翼と、これに道徳的知的に尊敬すべき性質を与える教育のある、人間的な、社会主義的改革者の「最善の型」と称しうるものの右翼である。この中間になにもものかの介在しうる余地があるだろうか。我々の各自が、自分たちを保守主義的自由貿易論者の「最善の型」と考えるべきか、または社会主義改良家の「最善の型」と考えるべきか、そしてそれでやってゆくべきか……階級間の利益に係らず、頑固主義や破壊主義の両者の影響から離れて将来の建設を考え……かかる政党の哲学と実践は何であるかと、私の考えを簡単に描写しようと思う。

まず最初にそれは過去の死材から解放されねばならない。……旧式の個人主義と自由法人にこだわれば保守党左翼以外には今日の立場はない。十九世紀の成功に大なる貢献はしたが、現代の条件に適用できなくなっているから……われわれの問題は自由主義の歴史的問題を扱うのではなく、政党の問題か否かも問わず、今日の生きた利益、緊急の重要な事柄について……

私は今日の問題を五つに分かつ。

- 1 平和問題 2 政府の問題 3 性の問題 4 麻薬の問題
5 経済問題

平和問題については徹頭徹尾平和主義でありたい。英帝国に関してはインドを除いて重要な問題はないと思う。……ほかは有効的に分離してゆく過程が今やほとんど完全である……すべてのものに甚だ有利に行なわれている……平和の利益のために危険を冒したい……西欧における将来のあらゆる戦争に参加すると予想することは不必要……たとい弱くなる危険を冒しても仲裁と非武装の方向に組みする。次に政府の問題は……将来政府は過去に避けてきた幾多の責任をとらねばならないだろう。これらの目的には閣僚も議会も役に立たない……我々の仕事はできるだけ勢力を分散して、他に委ね、政府の義務を新旧とも、委託できるような半独立団体や行政機関を設立することでなければならない。しかも議会の民主的原則や最高の主権を損なうことなく……これらの問題は将来、かつて過去に参政権や二院間の関係でもめたように重要で困難であろう。

私が性の問題の部類に入れるのは、政党の問題ではなかったが……今ではすべてが変わった。大多数がこれ以上に関心を持つ問題は他になく、

より広く論議されるのも少ないが……真正でまじめな意見の相違を引き起こさざるを得ない。そのあるものは経済問題の解決の奥ふかくに根差している。

性の問題は、政治の分野に入ってくるべき時だということは疑いを入れられない。選挙権獲得運動が代表するそもそもの始りは、表面にでない重要問題をその底に蔵する兆候である。

産児調整と避妊具の使用、婚姻法、性的犯罪と不法行為、婦人の経済的位置、家庭の経済的地位これらすべてのことについて法律や正統派の論議の現状はなお中世的だが、進歩した意見、進歩した実際問題としてでなく、教育のあるなしによらず、私的に交わされるようになった意見は強力に推移する。産児制限や離婚法の改正で衝撃を受けるのは、勤労婦人だけと想像してはならない。むしろこれらは新しい自由、最も堪えがたき圧制からの解放を意味する。集会で公然とまた賢明に論ずる政党は有権者に新しい生きた関心を呼ぶだろう。

なぜなら、政治は誰でもが知りたいと思うこと、誰でもの生活に深く係ったことを、今一度扱うことになるからである。これらはまた避けることのできない経済的な問題と相互関連を持つ。産児制限は一方で婦人の自由に触れるとともに、他方で人口の大きさを考え軍隊の多きさ予算の額を考慮するについての国家の義務にからんでくる。賃金労働に従う婦人の地位や、家族賃金の計画は、第一には支払われた仕事を行うことで、第二には支払われない仕事を行うことで、ただ単に婦人の地位に関係するだけでなく、賃金が自由放任の正統派の理論にしたがって、供給と需要の力により決せらるべきか、あるいはすべての事情に関係のある「公正」「合理的」に考えた力の自由を、制限し始めるかの選択の問題を引き起こす。

わがくにの麻薬の問題は、実際には飲酒問題に限られる、賭博もこの項目に加えたい。アルコールの禁止、かけ事の禁止は役に立つだろうが、問題は解決しない。退屈し苦しんでいる人間が、時折逃避とか刺激を求めることが、どの程度許されるか、それは重要な問題である……惑溺の不幸な階層を、抵抗しがたい誘惑から守る……酒類販売の許可、乱痴気騒ぎ、ばか騒ぎの特許は可能だろうか。私は解答を留保して、すべての政治問題のうち最大の、私が最も語る資格のある問題、すなわち経済問題に急がねばならない。

……現今の経済的推移を最初に認めたコンモンズ教授は三段階の三つ

の経済秩序を区別し、その第三段階に我々が今や入りつつあると為した。

1 非能率か暴力か戦争か習慣か迷信からかの欠乏の時代、ついで 2 豊富の時代、そして今の 3 安定の時代 「マルクスの共産主義に現実に代わるもの」の特長をもつ。

彼の云うように「部分的には政府の法令によって強められたと言えるが、主として集中行為による経済上の許可によって個人的自由が強く減退した。その行為は、あるいは秘密に、半ば公然と、あるいは公然と、または仲裁的な意味で団体、会社、組合、その他製造業者や商人や労働者や農民や銀行家などの集団的活動によったもの」になる。

統治の範囲でこの時代の弊害は一方ではファシズムであり、他方ではボルシェヴィズムである。社会主義はなんら中道でない、なぜならそれも豊富の時代の前提から発生していると同時に、自由放任の個人主義や経済力の自由な行使から発生しているから…… 経済的無政府の時代から、社会的正義と社会的安定の利益のために経済力を統制し指導することを、思慮深い目的とする時代への推移は、技術的に政治的に非常な困難を経るが、私は新自由主義の真の目的はこれの解決を求めるためにあると云いたい。

今日我々の眼前に、現在支配的な思想混乱の結果の実物教訓に、石炭工業がある、国の財務当局と英蘭銀行は、供給と需要の力の自由な働きによって、経済的調整が為されうるし、為されねばならないという前提の政党学派の十九世紀的政策を踏襲している……それが現実に今日の経済生活に起こるとなお信じていた、少なくとも一二週間前まではそう信じていた。

他方において、単に事実だけでなく輿論もコンモンズ教授のいう安定の時代の方向に長い間動いてきた。労働組合は供給と需要の力の自由な働きに干渉できるほど十分強く、輿論は労働組合が危険になりつつあるという不平と疑惑以上のものを持つに係らず、坑夫がそれを動かす力のない残忍な経済力の犠牲になってはならぬという主な観点から、組合を支持している。たとえば貨幣の価値を変えてから、供給と需要の力によってその後の調整を図るに任せることができるという旧世界の政党の思想は、労働組合が無力で、経済上の習慣が障害なしに称賛され、進歩の大道を打ち破って進むことのできた五十年百年前のものである。……新しい時代には新しい知恵を創りださなければならない、同時にもし、なんらかの善を為そうとするなら、我々はかつて我々を生み出したものに対して、異端者で、邪魔で、危険で、従順でない風をせねばならない。

経済社会ではまず何よりも経済的な力の働きに適合し、これを支配する新しい政策と新しい用具を見だし、社会的安定と社会的正義の利益に適し、妥当な事柄に関する近代思想を、我慢ならぬほどは妨げないようにすることである。長くかかり違った型もあるこの政治闘争の始めの段階が、貨幣政策に集中することは当然で……

政党の綱領というものは現実の事柄の圧力、刺激のもとに発展せねばならない、最も一般的な言葉で開陳するのでなければ、これをあらかじめ規定することは役に立たない。しかしもし、自由党がその力を回復するとするなら、それはある態度を、哲学を、方向を持たねばならない。私は政治に対する私自身の態度を示すために努力した。しかして私が述べたことを手掛かりとして、最初に私が提出した問題「私は自由主義者か」という問題に対する答えを見いだすことは他の人に任せよう。

以上がケインズの1925年の講演の抜粋である

「新自由主義」と述べているこの講演は、直近の将来の英帝国のたどるべき、迎るであろう道程の、状況変換の認識であって、七十余年を経過した今日においてさえ、ある種の香気に満ちた新鮮さを保っていると思うし、この訳出が昭和27年であることを考えると、すでに四半世紀を経過しても、古びなかった経済的で政治的提言であったことが驚異である。訳出の労を執られた慧眼には恐れ入るしかない。訳文の省略部分は、叙述の本旨を変えるものではなく、講演とその記述に関して、ときおり起こる重複を避けただけで、……この6つの点の部分がそうである……8つの点は、長い言い換えで反復とおもわれる部分の省略である。

状況変換の認識 実例2

エリツイン大統領 改革の総決算へ 1997-6/12 共同モスクワ杉崎洋文記者

今年1997三月、クレムリンの大統領執務室。「マフィアが支配する資本主義をはびこらせていいのですか」と迫るネムツォフ・ニジェゴロド州知事（現第一副首相）。「このままでは駄目だ。わたしは歴史の教科書にヤロスラフ賢公（11世紀キエフロシアを統一し発展させた大公）として名を残したい」と大統領。改革を成し遂げたいという大統領の決意を確信しネムツォフ氏は入閣に同意したという。ソ連を解体、新生ロシア建設を手掛けた大統領は今、自ら生み出した「ゆがんだ資本主義」を修正し、旧ソ連諸国の再統合を目指すという「後世の評価を意識した改革の総決算」（大統領府高官）にとりくんでいる。1992年にエリツイン

政権が着手した経済計画は財政の破綻、国民生活の窮乏、工業生産の落ち込みを招く一方、官僚機構と癒着した極く一部の企業家に膨大な富が集中、汚職が蔓延した。

同政権は94年末、分離独立を求めるチェチェン共和国に軍事介入し「強権体質」を露呈、中東欧諸国のNATO加盟の動きを加速した。チェチェン和平やNATOとの合意の意義は大きい、自ら引き起こした混乱の収拾で、ようやく内政に専念する環境を整えたにすぎない面もある。

大統領は、三月の内閣改造で登用した若手改革派のチュバイス、ネムツォフ両第一副首相を中心に、97年予算の歳出を大幅に切り詰める修正、社会主義体制の残存物であるガス、電気、通信、鉄道など「独占体」の改革、更に財政の大きな負担になっている住宅公共サービス制度、軍の改革に着手した。何れも国民に痛みをもたらすため、共産党など左翼系野党は対決姿勢を強め、官僚機構、独占企業体も激しく抵抗している。

大統領は汚職追放のため、公務員の資産申告を義務付けるなど、国民の政権への信頼回復に躍起だ。大統領府には昨年の大統領の再選運動を担当した広告会社の社員が参画、大統領を頻繁にテレビに登場させて「イメージアップ作戦」を展開している。しかし、最大の不安材料は依然、健康問題。昨年、心臓手術を乗り切り、最近では体調がよさそうな大統領だが、クレムリン医療筋によると、心臓発作は「いつでも再発する危険」がある。大統領は以前に比べ執務時間を大幅に削減、モスクワ郊外の別荘で頻繁に静養しながら厳しい日程をこなしている。

エリツインロシア大統領は先月、チェチェン共和国と平和条約を締結したのに続いて、北大西洋条約機構NATOとの「基本文書」での合意を達成。さらにロジオノフ国防相を解任して軍改革断交の決意を表明。ベラルーシとの連邦条約調印など意欲的に執務を続けている。2000年まで任期三年余りを残し「功績を挙げて歴史に名を残す」ため、健康不安という“爆弾”を抱えながら「エリツイン改革」の総仕上げにかかったと言える。

以上、杉崎記者の報告の概要

このような結末を迎えたソ連崩壊後のロシア改革の、その発端での状況転換の主役の認識はどうであったかの実例が2で、その認識のそもそも発端を次の実例3にする。

状況変換の認識モデル 実例3

Marx1859 経済学批判序文から、いわゆる公式部分

「人間は、かれらの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志とは独立した諸関係、すなわちかれらの物質的生産力の一定の発展段階に照応する生産関係を取り結ぶ。これらの生産関係の総体が社会の経済的構造、現実の土台をなし、その土台の上に、法律上および政治上の上部構造がそびえ立ち、そして一定の社会的意識形態がそれに照応する。」A ところで

「社会の物質的生産力は一定の発展段階に達すると、その生産力がこれまでその内部で発達してきた現存の生産関係、またはその法律的表現にすぎない所有関係と矛盾するに至る。これらの関係は、生産力を発展させる形式から生産力のくびきにかわる」B

「物質的生活の生産様式は、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。(人間の意識がかれらの存在を規定するのでなく、反対に、かれらの社会的存在がかれらの意識を規定する)」C

「ここにおいて社会変革の時期がやってくる。経済的基礎の変動につれて、巨大な上部構造の全体が、あるいは徐々に、あるいは急速に、変革される。」D

「このような変革を観察するにあたっては、常に、生産に経済的諸条件に生じた、自然科学的正確さをもって確認される物質的な変革と、人々がこの衝突を意識してこの衝突を闘い抜くところの、法律的、政治的、宗教的、芸術的、哲学的形態、簡単に云えばイデオロギー的形態とを区別することが必要である。ある個人を判断するのに、その個人が自分のことをどう考えているかによって判断してはならないように、このような変革の時代を判断するのに、その時代の意識によって判断してはならない。むしろ反対に、この意識は物質的生活の諸矛盾から、社会的生産力と生産関係とのあいだに存在する衝突から説明されなければならない。」E

「一つの社会構成体は、それが狭すぎるようになるまですべての生産力が発展してからでなくては、決して滅亡せず、新しいより高次の生産関係も、この存立の物質的諸条件が旧い社会自身の胎内で成熟するまでは決して出現しない。」F

「したがって、人間は常に解決しうる問題のみを問題とするのである。なぜなら、くわしく観察してみると、問題そのものは、その解決の物質的条件がすでに存在しているか、または少なくとも生成の過程にある時にものみ発生するものだからである。」G

マルクスレーニンスターリン主義の核心ををなす史的唯物論の定式の原形訳はこれであるが、時代を経るにつれ表現が訳も改められるが、気付かれず、強弁され、変形された。変形のピークはスターリン時代。ソ連のアカデミーの名で強行されたものもあるようで、わが知識人のなかでは経済学教科書を通じて、弁証法的唯物論の訳著を通じて学習せられ、鵜呑みにされたようだ。その変更された著しい例は、つぎのようになる。

1 マルクス主義は、社会主義の理論であるだけでなく、全一の世界観であり、哲学体系であって……弁証法的唯物論と呼ばれる。……その方法が弁証法的であり、その理論が唯物論的だからである。

2 史的唯物論は社会の発展の最も一般的な法則に関する科学である……もろもろの社会科学（経済学、美学、言語学）は、社会生活のあれこれの個々の側面の発展、一定種類の社会関係の発展を研究する。史的唯物論はこれらの科学とは違って、全体としての社会発展の法則を、そのすべての側面の相互作用において研究する。

3 史的唯物論は、社会制度の性格を規定するものは何か、社会の発展は何に制約されるか、一つの社会制度から他の社会制度への移行、例えば資本主義から社会主義への移行は何に依存するかという問題に答えを与える。個々の国および国民の社会生活に起こった諸事件の経過を具体的にのべる歴史とは違って、史的唯物論は歴史経過の一般法則の研究をその任務とする。（ソビエト研究者協会訳、史的唯物論上巻から1～3と、次の4）

4 弁証法的唯物論は、マルクス主義の哲学であり、科学的共産主義の理論的な土台であり、共産党の世界観である。

こんな具合で、ソヴィエト同盟科学院哲学研究所の多数学者が弁証法的唯物論に関して正確な表現を持たないから、当時のソ連の状況変換をどのようにひとは実際に認識していたかは、教条のほかは知りようがない感がある。しかし、定式の変更は、定式からの逸脱は、公許のもの以外は、批判が起ころうなものだが、それが無い。（スターリン著 石堂清倫訳 「無政府主義か社会主義か」）

「……完全な弁証法的な世界の画像を与える」とか「……現実を認識し、それを革命的に変革する普遍的な方法である」「……知識のあらゆるほかの部門がし遂げた成果を、科学的に一般化したものである」

このほかに「哲学だ」「世界観だ」と脈絡のないアカデミーではある。逸脱の故に処罰された話も、聞いたことがないからこの種類のゲンロンは放置されてあったのだろう。それなら体制腐敗の前駆兆候になる。と

もかく、定式の理解の変更と状況から来る変更が絡む。変更、解釈と布
 衍などを「発展」の一語で片づけ、公許でないものは「修正だ」と非難
 する、悲惨な言論。だから、定式A～Dの変更は、生産様式の諸変化を、
 全社会制度、全社会的観念、政治的見解、政治的機関の変化を不可避的
 によびおこす……つまり社会的政治的組織体の再編成をよびおこす……

評論をくわえて論点を整理する

物体と精神とは決して同一の意味において存在するとは云えない。だ
 からといって唯物論が常識を超えて世界観をなすことと、科学であるこ
 と革命の理論であることを認めるためには、一種の宗教的帰依状態が前
 提になる、が、これに気付くことの意外に難しいのはどうしたことか。外
 覚と内覚のちがいを越えて精神と物体は交互作用をなす、と言う常識に
 従えば、社会史観は尤に成立しても、唯物論の制覇は眉唾である。それ
 が信じられるには宗教的思い入れが必要である、人類の先祖をアダムイ
 ヴで納得するほどの思い入れが要る。それを強制してはならないのに、
 唯物論を真理と強弁し、弁証法を無二の理論とするから、救いようのな
 い過誤が生じると、思われる。それが疑いのない真理なら、マルクスが、
 レーニンがとか、イヴェスターリンがと言わずで足りる。

階級闘争、搾取支配、階級独裁、などの偏歪の根拠が唯物史観にある
 と知って共産党の離党はできるであろうか。ゴルバもエリツィンの離党
 も理由は唯物論の不毛を見たからではなかったか、夢と化した共産主義
 の放棄は云わずとも、憎き資本主義の変換も知らぬでもなかろうから尚
 更で。帝国主義と覇権主義は政治家の立場上、捨てきれないにしても。
 長年にわたる迷惑は人民大衆が負う。スターリンの主導下の政治的犠牲
 は6000万人とか。

書き換えられた唯物史観は、いな史的唯物論の作り替えは、レーニン
 が一国社会主義を領導し「新しい結論をもって古いマルクス主義の結論
 の一つに取り換え」るに始る。それはさらに「……レーニンは、発展の
 なかには、ゆっくりとした進化といっしょに、速やかな飛躍が含まれて
 いることを証明した」「……ヨーロッパのみが我々に道を示しうるなど
 という陳腐な考えを、我々は捨てる必要がある」

これは定式の解釈の問題で、公式にかけている厳密さの隙をどう辻褃
 を合わせるかの問題でもある、すなわち、資本主義の最も発達した西欧、
 欧米で始発すべき革命なのかまたは、それから離れた、しかしそれを遠
 望する、生産力では劣弱な状況の「くに」でも先行しうる革命なのか。
 定式を書いたマルクスは多分、露国での始発ではなく独逸での革命生起

を想っていたであろうが、定式の緩みは、解釈として露国発生の革命をも包含できる内容だった。

この種の、定式のあいまいさ、乃至は要点指摘かつ解説付きの簡明が狙いの、文学的表現の狙いは、当然に不完全燃焼だったから、スターリン段階でさまざまな加工を許し定式にない添加物でノッキングを抑えようとし、定式解釈は複雑化するが、唯物史観を社会史観に寄せ変えながら、起動力史観には固執し、それで論理破綻を引き起こし、難解晦渋応用の効かない、それでも、むりやり状況変換の認識でもあろうとする。社会主義革命の成就が、目前で共産主義社会に手の届きそうな状況があると仄めかしたり、東風が西風を押し下す強弁が喝采を受けたりする。ついでながら、文化大革命も状況変換の無理やり解釈に起因する「風」であった。そもそも定式が「社会の物質的生活の諸条件」下に生産力と生産関係と生産様式を示すにとどまったから、スターリンは悠々と追加を行い、地理的環境も人口の増加も科学ないし技術の発達などを加え、さらには定式が表現の変更転換をしきりに行うことに乗じて、上部構造に追加は、「単に社会の政治的・法律的・哲学的・美学的および宗教的見解ばかりでなく、これに照応する制度もそうである」とイヴェスターリンは教えていると言い足したりする。

「階級社会では、政治的および法律の見解に照応するものに、国家とその立法権および執行権、国家の懲罰機関に自らの集中的な表現を見いだす……政党、各種の組合や結社の全体系が……宗教の見解に照応するものに……教会がある……」こうなると唯物史観のID理解は複雑でお手上げ、それが狙いかも。ソ連のイデオロギイ韜晦、それが政治策略！スターリンの見解を祖述したソ連の学者相互の齟齬は放置され定式はいわば神棚に祭り上げられる。中国の場合、毛語録にきりぎりまれマルクスエンゲルは煙霧のかなたの雄たけびにされる。事例3に関連する支持者の認識は以上で尽きるものでないが、いくら追加しても唯物史観の発展と称する変更か修正であるから、状況変換の認識に新たな知見をみいだすことからは遠い。ソ連倒壊以後のアカデミイないし世界の唯物論学者の、社会史観の革命的部分たる唯物史観の進展は、不明で、この稿においては準備がない。

状況変換の認識 現況からの評論（事例の4にあたる）

現在の時点で世界の共産主義支配体制は実在しないが、共産主義招来を標榜する政治活動は散在するごとくである。状況の変換目標を共産社

会におく政治活動集団を名乗る場合、共産党以外に社会党も民社党も社民党もあろうが、それ以外にも有りえよう。しかし綱領を掲げ、現時点からの状況変換の手順ないし移行過程を読み通した実践集団が秘密結社でなくて、存在することは知らない。知らないのは乃公ばかりとも思えない。共産党を名乗っても、議会内政党で、公然と革命を唱道しない政党は存在する。マルクスレーニンの党と、縁を切った場合と否とは両立するごとく、並立する、対立するごとく、決め手にかけるが、そんなことはどうでもいいことなのかも知れない。と言うのも、アセアン10の中には、それらしき政党指導の国家が入っているからで、その国の掲げる将来像への転換構想に喫緊の危険はないと見ての拡大で包容であるか。

はなはだ曖昧な推測であるが、アセアン10自体がソリッドな結合でないことは確からしいと聞いての話。状況変換の認識は、いかにもあるなしが明瞭でない。状況流動にお任せの感は、国債為替相場のチェックが出来るのか出来ないのかに似ていないこともない。それなら、70年前の実例1の講演者の心境と大差ないではないか。すでにその時に、唯物史観の信奉者はいたし、それも秘密の認識ではなかった、インテリには周知の状況判断の切り札のようなものだったかも。講演者はその状況を宗教的と言い、その言葉の反応の、受取かたの違いを気にして、語っている。すでに「あいまい」なのである、招来状況の読みと変換経過の策定のズレは。だから「一歩前進二歩後退」の表出もおこるのだ。

イヴェスターリンが云っている、教えている、書いている……では片付かないし、ソ連崩壊でもきりはつかない。状況変換は独裁者の気ままにならない、どんな強力な指導者でも、状況転換と変換の認識は一国の指導者に専断のことで有りえない。それを独断できる筋合いのものではないとおもう。定式といい公式と言い、伸縮自在の莫大小をいつまでもふりかざすのに羞恥心の働く指導者と教祖が必要、とする党嚮導者が要る、高齢の指導者がいるのは、ヒトの日常から忍ばねばなるまい。革命は気長にとなる、黒いネコも白いネコも鼠を捕るネコがいいネコだ、ということにもなる。

階級敵を恐怖に追い込むことの、是非は状況次第で。暴力革命だけが革命ではない、文化革命こそ、永久革命が……国家と革命、国家の死滅。ソ連の国家崩壊はべつ。色々な言い回し色々なことを言い散らし、断言し、恐らくはおのずからに混乱した認識の一つの、さまざまな結論の一つが、唯物史観の解明。「生活」と「意識」を自覚的に問題としているか否か、批判はここから出立しなければならない。(ということは、弁

証法とか唯物論とかの揚言は、「科学」を言い立てた段階でおわっているから)

そのまえに「科学としての史的唯物論」を再整理する。テキストは「史的唯物論」第1冊でコンスタンチーフ監修、ソ同盟科学院哲学研究所編ソヴィエト研究者協会訳 大月書店昭和30年4月

1 科学としての史的唯物論 1 史的唯物論の対象 1p……史的唯物論は、社会発展の一般法則にかんする科学である。……史的唯物論は、これらの科学とは違って、全体としての社会の発展法則、社会生活のあらゆる側面の相互作用を研究する。……人類は、原始共同体制から、奴隷制、封建制および資本主義をへて、すでに地球の六分の一の部分—ソ同盟一で勝利をとげ、人民民主主義諸国で建設されつつある社会主義に至るまでの長い、複雑な発展の道をとってきた。この前進的発展の根本的な推進力は、どのようなものであろうか？こうした問題に対する科学的な解答をはじめてあたえたのは史的唯物論である。すなわち、社会史を、そのいっさいの多面性と矛盾性のうちにとらえた、単一の合法的な過程として認識する道をさしめし、現在を正しく理解し、将来を予見する可能性をあたえる理論である。……3p逆3行～4p3行

2 史的唯物論の創造は、科学における最大の革命である史的唯物論は、十九世紀の四十年代に発生した。それは、偉大な学者および思想家であり労働者階級の教師であり指導者であるマルクスとエンゲルスによって創造された。……16p逆6行～17p逆3行 つづけて

マルクスとエンゲルスが唯物史観を創造したことは、科学思想の最大の収穫であり、科学上の社会史観上の革命的変革である。……「経済学批判」の有名な「序言」のなかであたえている。この特徴づけはつぎのとおりである「人間はその生活の社会的生産において……特徴づけ、とは従来の公式ないし定式のことである。このあと 3 社会の発展法則 その客観的性格 4 歴史的合法的な性と人間の意識的活動 自由と必然性 5 史的唯物論の党派性とその創造的性格 6 ブルジョワ社会学の崩壊 科学としての……要約 などと続くが あまりにくだいので略す

このあたりのまとめ

唯物史観が「科学」であり「社会史観」上の革命的変革である……という言明は p17の一個所だけで、あと社会史観の用語は隠れる、唯物史観も社会の発展を科学するので社会史観の一つというわけであろうか。定式公式が一度だけ出てくると同じで、それに言及して、後は棚上げ

である。

史観の基準から見て、史観は「時間的連続における事実を対象とする時間的連続を予想する関連構成を方法とする認識、その科学」であるから、広義でいう歴史に属すが、関連構成的でない歴史学、普通いう歴史から区別される。史観の観がそれを示すと云ってよい。史観の要素の必須的と選択的、時間的連続の事実と関連構成は必須であるが、唯物的とか弁証法的とかは必須でなく選択的な要素であるが、間違われ易い。

間違い理由は御存知の執拗な宣伝である。個人史観と社会史観、総合化史観と特殊化史観、通性化と個性化、だから英雄史観とか文芸史観とか階級史観とか成り立ち、環境史観、唯物史観、生活史観、弁証法的史観、嚮導理念史観、革命史観、発達史観が競い立つ。

さらに関連構成の着眼において、社会の変転の認識を起動力本位に置く見方か、網羅は容易でないがゆえに、あるいは標識者に置く見方かで、起動力史観と標識者史観が選択的に交差する。ついでに起動力の発見は、錯誤であるが、従来歴史哲学の任務にされた。起動力の解明は本来、科学的である、だから科学としての起動力史観は、未達成。精神史観に対する物質史観、形而上学的と認識論的とかドイツ観念論のロシア版が、人類と非人類に起動力を求めるが、労働に着眼することなら科学的で、精神か物質かで起動力を論じるならば形而上学的論議で、哲学に類する論議になる。わかりきったことであるが。

かくて史観は、科学であるなら哲学ではない、唯心論でも唯物論でもありえない。背景に哲学があると云ってもそれがために、哲学となるものでない。政治を数において論じても、経済を数において論じても、それで数学とならないに同じである。いささかくどい言いようであるが。

マルクス主義者の固執する哲学的唯物論は、それを重要な理論的武器と信じたことに始るが、全くの誤解で無駄である。かくて科学としての史的唯物論は、起動力の網羅を急ぎながら果たしえず、生産力と生産関係のキマイラを抱えたまま、転倒する。転倒理由の一つは、すべてとはいえないが、部分的起動力史観で物質中心史観であったからである。裏を返せば、総体起動力史観でないからである。社会史観と言う言い方までたどり着きながら、誰が足を引っ張ったのか、多分スターリンと配下のアカデミーであろう。

状況変換の認識 わが邦での実例 社会史観外論 p 158 3行目から
14行 社会史観 弘文堂 昭和35年 刊

史観の基準としてみられるべき総体起動力史観においても、環境もしくは物質の重視せられるべきことは、まさに以上の如くである。ただし、それにしても、人類社会の変遷の起動力として活発かつ自在の—したがって顕著な—役目をなすものが、人生もしくは一層根源的に精神に存することは、けだし、疑われ得ないであろう。元来、物質界の原則と精神界の原則とは、根本的にその特質を異にし、物質は物質としての、および精神は精神としての原則に従って動くから、到底、その一つをもって他を推断することは、許されないものであるが、しかし、それにもかかわらず、何れかといえば、精神界の原則が、物質界のそれよりも、一層複雑かつ不整齊であって、したがってまた、活発かつ自在であることは、もとより、認められ得る。物質界の原則と精神界の原則との外に、全く独自のものとして、なお、物質より精神へ働きかける場合の、そしてまた、反対に精神より物質へ働きかける場合の、原則が存しなければならぬが、これらの場合に見られるつぎの事実、詳言すれば、精神界の原因を同一にすれば、物質界に同様な結果を惹起しうるに反して、物質界の刺激を同一にしても、精神界に必ずしも一様な成果を招致し得ないというような事実も、また、精神界の原則が、物質界のそれに比して、一層複雑かつ不整齊であることを示すものであると、いはれなければならぬ。

だから、一般に精神もしくはこれに立脚するものとしての人生は、物質もしくは環境よりも、社会の変遷の起動力として、一層顕著な役目をなすといはれなければならぬ。ましてや、社会の変遷に対しては、物質もしくは環境の影響は、間接かつ経過的であるが、これに反して、ヒトの精神もしくは人生の影響は、直接的かつ即座的に行なわれるにおいてをや。

以上で社会史観からの引用はおわる

たしかに、ソ連国家の崩壊ないし瓦解の劇的な役割を演じたのは、労働者でも共産党でもなく、その指導者の宣言と言うか演説であった、言語であり、情報であった。ある人間の歴史的行為であった。これを指導者の生産力などと言いくるめ得ない。また、実例1で記した講演者が自由党をどう変えたかは、後日の問題である。国家崩壊の宣言者の後日談もあろうが、指導者が「直接かつ即座的」役目を果たしたことは疑えない。そしてこの指摘のゆえに、それを個人史観とか英雄史観ともいわないであろう。

国家は個人を越えた、比較にならぬほど巨大な機構を備えた、社会構

成体であるが、それゆえに、核心において、その機関者の枢機に決定せられる。開戦にしても終戦にしてもそうである、それゆえにこうしたことは、政治史のかたりにふさわしいが、状況の局面に拘束され、重大事件であるゆえに歴史に刻まれ関連認識からはしばしば埋没する。クレオパトラの「はな」の話も同類であろう。

国家はエジプトで、さらに遡る時点に、他の地域にも、黄河中流にも、遺跡を通じその経営技法までも解説された、人類古文化のなかに創設された国家がその輪郭を明らかにしつつある。これらの国家を自然国家というのは、後代の文化国家ないし文明国家に比して、はるかに自然のめぐみに依存する邦国であったからであり、その機構も遙かに古拙である。

それゆえ宗教技法に中樞をゆだねた原始国家でもあった。しかしすでに原姿の社会を古代文明に引き継ぐ能性は十分に備えた、古文明に展開する国家である。しいて国家と言わぬなら、邦国というべく、あたかも州も域も邦も匡も郷もクニと読めるごとくに、緩やかな概念において国ないし邦を、そのような状況下の社会構成体として認識したらよい。

国家は邦国はかくて、環境の中に、人間によって、その技法に拠って創設され、変換を重ね、個別の興亡、新設交替を織りなしながらに存在を継続している今日において、ほとんどの人類が何れかの邦国に縁を繋いでいる。そしていま国家は、数えようによっては、二百近く、国家を象徴する旗を国旗というが、それをこぞって「万国」旗というほど、文明の中に、知らずして覇を競い、席を並べようと務める。

二十世紀の後半に、植民地を離脱した独立邦国の多数の出立は、国家の世紀と思われたから、国家レベルの国際機関も邦国数に負けぬほどに編制されたから、多元国家時代とも考えられたが、依然、国際世界は世界国家を現出し得なかったが。

優勢な国家群に主導される国家対峙の状況が、変換を続けつつ、国家協和の認識を佳しとする状況に、近い将来には到達するであろうと楽観したい気分が、一面にこれはおおくの人の期待であろうが、他面で、悲観的に個別の国家に対する絶望を語り、国家の、日本の滅びを描く知識人がいないわけではない。

むすび

世界の一切が、放任しておいても自動的に調和を達成すると信ずることは、近代合理主義ないし理性信仰の枠内で成立する観念の一種であって、ニュートンの自然観とも合致する決定論に与することでもあった。

この立場は、現実の経済過程が、もはや自由放任主義の自然調和の破綻を暴露したあとでも、自由放任の結果、自由競争の条件が崩壊したあとにおいてさえも、自然的秩序への確信が願望にかわる政治経済のイデオロギーの深情けを、物語るであろう。

二度にわたってなお決着のつかない世界大戦は、当事国の国民に、国家と自由のために闘うとの信念を昂揚したが、それは同時に勝利のための計画に、自由も従うこと、戦争体制の相違を問わず、政治体制の如何に係らず、計画への動員は勝利のために自由の献身と犠牲を強いるに終わった。大戦の推移と結果も、自由と計画の親密化が解除されないまま、現実と理念の双方における自由放任主義の完全な敗退が、暗黙の了解になってしまった。

二十世紀動乱の結果は、国家に関して云えば、安上がりの政府をその実質的な内容にする消極国家の夢も、広範な社会機能を負荷された総合行政機構を目指す積極国家に転移する現実に戻ることを意味した。世界政府までが日程に数えられた。

資本主義側が試行錯誤のあとにたどり着いた「計画化」の観念は、社会主義側では始めから予期され自体としてあるが、それでも始めからうまくいく保障は皆無で、現実の体制としての社会主義維持のために強行される、先行き不明の経済計画の前進と後退、編制の施行は、錯誤と犠牲を反復拡大する状況におかれた。革命の結果、適当なモデルもなしに開始せざるを得ない計画経済のイバラの道は、それが進行するにつれ、次第に過度の中央集権的官僚と過度の官僚主義の引き回しとなり、計画それ自体の不適応が倍加し、特に過剰で論争的であった初期社会主義方法の幻想を幻滅にまで追い込み、その分さらに体制側のイデオロギイの粉飾が激しく、「計画」は社会主義の装飾物に成り下がった。

計画技術の科学化は、繰り返される失敗のあとで、資本主義と並び、異なる動機で支えられる、経済計画の「計量最適」の測定、非党派の共通課題に取り組む羽目に立ち至るのは皮肉であるし、この間計画の犠牲にされた人民と衆庶は悲惨というほかはない。さらに核武装、冷戦下の軍備競争は法外の負担となる。加えて問題なのは、弱小の民族ないし国家が、大国の計画イデオロギイの障害と見なされ救済が見られず、国際的不公正が、大国の利益と覇権保持の故に、無視されることである。国内的にもそれに符合して、強者の言い分が優先して「逆能作」の金融が猖獗して、そのことの故に一時的にもせよ「正能作」の翳りから、逆

風の時代の認識が当然とされる。

ことを、「和の邦にほん」に向ければ、自民党の横着を追求しきれない野党の無力さは、日本の政治も世界状況の一片で、野党の追い風にならない事情を示すかのように、社会不満は不正に甘く是正に無力な政党政治に無関心を装っている。強者はウソを動員してコトをすます、米ソ中日、それぞれのウソと、けちな報道がはやるのは、情報化時代の世論操作に腐心する啓蒙帝王とその亜流が政治倫理ないし報道の倫理を、他人ごとに思う傲岸に起因しよう。

国家の機能主体としての要諦は、総体としての政治実践であろうから、それは究極においては時代の社会目的の達成に、言い換えれば時代の社会価値選択の制御ないし社会的価値選択の総合に至るから、そのような政治を可能にする社会的合意の規整としての権力場の設営そのものとも云いえよう。現時点における社会の計画化は、公式的抽象論の指導がすでに破綻しているゆえに具体的な、比較を絶して計量化された救済管理に重心を移して経営される。イデオロギイの終焉とは、このとき運営と管理が、計画の理念に優先する事態を指称する如く、コンピューターの猖獗がそれをつぐであろう。そこでは予測手段と社会工学装置が説得力となり、政治的に見るなら、議会討論の儀礼化が著しく、議会は、執行と経営の実態を装飾する役目に自足して、政治課題と目的をめぐる効果的なフィードバックさえ実施の違もない、恐るべき暴走の時代になったことをさす。

極言すれば「計量された暴走時代」である。取り残された社会と国家が、いつれ後を追って環境行政計画機構の整備に走るであろうことをトップグループは覚悟していよう。先進と後続の、近代化ないし現代化路線論争、民族ごとに多様になったとされる社会主義路線も、米ソがそれぞれに大統領と民主化を、軍事競争に並べ、軍縮を競って軍事編制を刷新し、友邦に勝手な注文を付けて、世界分割支配の維持とエンメイを図るためにも、脱IDの計画は迅速な推計によって決断されなければならないし、持続可能な経済路線に変更されなければならない。変更しえない路線は、暴走時代の政治決定にはふさわしくないであろう。

後続のランナーは、先行の迷いこんだ袋小路に連られてはならない。コースに定めがないから、各自の国家に各自が責任倫理を自覚して、「人権の国家」実践を計画的に演出しなければならない。その各自とは、

もはや階級でなく前衛の党でもない、それなら無謬の議長だろうか、選出された大統領であろうか。民主化を看板の大衆指導者グループであろうか。それともまさかの衆庶で女性議員達であろうか。

近い将来についてはもとよりのこと、遠い将来についても、国家はその名称が如何に代わろうとも、死滅とか消滅できる組織の別名ではない。避けられない計画化との相克から、維新体制と呼び変えようと、新管理システムに見なされようとも、社会機能の総合行政機構を演ずる国家は、変転はあっても不易である。死滅を云うなら階級国家であるが、すでに、全人民国家が交替している。こうであるから、すべての国家の将来にそれぞれの価値を盛り込むことは、それぞれ一国の構成員で、かつ共に生くべきヒトビトの務めである。